

岩手方言における拍の統合現象

——共通語の「ル」と「リ」、「ヌ」と「ニ」に対応する拍について——

斎藤孝滋

[1] はじめに

岩手方言では、多くの地域で共通語の「ス」と「シ」、「ズ」と「ジ」、「ツ」と「チ」に対応する拍が、混同し、/su/、/zu/、/cu/あるいは/si/、/zi/、/ci/に統合する現象がある。この現象については、従来数多くの研究報告があるが、中でも「北奥方言における音韻変化の特色について—特にシチジとスツズを中心に—」(森下喜一氏1983)にくわしく論じられている。

しかし、上記の拍以外に、「ル」と「リ」、「ヌ」と「ニ」に対応する拍にも統合現象がみられる方言があり、この統合現象については、『岩手方言の語彙』(小松代融一博士1959)、『岩手方言の音韻と語法』(同氏1976)に示されている語例によってうかがうことができるが(注1)、従来あまりくわしく論じられていないようである。

本稿では、筆者が調査を行なった二戸郡安代町(荒屋新町)方言(以下安代方言と称す)、盛岡市(大慈寺町)方言(以下盛岡土族ことばと称す)、盛岡市(紺屋町)方言(以下盛岡町ことばと称す)(注2)、久慈市(本町)方言(以下久慈方言と称す)、一関市舞川方言(以下舞川方言と称す)(注3)における、共通語の「ル」と「リ」、「ヌ」と「ニ」に対応する拍の統合現象について考察する。

なお、安代、盛岡、久慈、舞川ともに、共通語の「ス」と「シ」、「ズ」と「ジ」、「ツ」と「チ」に対応する拍が/su/、/zu/、/cu/に統合している、いわゆるズーズー弁の方言である。

[2] 調査について

岩手方言は、本堂寛氏(1982)の方言区画論によると、次の四つの地域に区分される。

- (一) 北部方言地域。秋田県・青森県に接する北部の地域。
- (二) 中部方言地域。盛岡市を中心とする内陸部の地域。
- (三) 沿岸方言地域。北部と南部を除いた沿岸地域。ただし、南部も一部入る。
- (四) 南部方言地域。南部地域全域。

筆者は、これら四つの地域から、安代（北部方言地域）、盛岡（中部方言地域）、久慈（沿岸方言地域）、舞川（南部方言地域）を選び、昭和59年7月～8月、昭和60年1月、3月～4月、8月～9月の期間に、音韻と動詞・形容詞の活用を中心に体系調査を行なった。

本稿の資料は、その際得られたものである。

調査は、informantのお宅におじゃまして行なった。但し、舞川の吉田耕吾氏については、公民館館長であるため、舞川公民館の一室で行なった。

調査方法は、なぞなぞ形式を基本としたが、筆者が共通語形を示す形で行なった部分もある。また、同音語など重要と思われる語については、informantの内省も確認し、調査資料は、テープに録音して調査後に再度チェックした。

なお、informantは、次の方々である。

安代方言…^{ウトサワ}宇土沢マツ氏（女性、大正7年生、農業、音韻を中心に調査）。高村良雄氏（男性、明治43年生、農業、音韻を中心に調査）。斎藤種男氏（男性、明治40年生、無職（以前40年間郵便局員）、文法を中心に調査）。

盛岡方言（士族ことば）…^{イワモチ}岩持文江氏（女性、明治40年生、無職、音韻・文法を調査）。

盛岡方言（町ことば）…山崎正造氏（男性、大正2年生、無職、音韻・文法を調査）。久慈方言…中野興吉氏（男性、大正9年生、元会社員、現飲食店業、音韻・文法を調査）。

舞川方言…^{ユムギダシ}蓬田稔氏（男性、昭和7年生、農業、音韻を中心に調査）。吉田耕吾氏（男性、大正7年生、公民館館長、文法を中心に調査）。

各氏とも、その土地生粋の方々である。

☆用いる特殊記号について

～ ;ゆれを示す。

※ ; [rū]、[nū] で表記してある部分がそれぞれ [rū] と [rī]、[nū] と [nī] の中間的な音であることを示す。

なお、アクセントは [ː] で示すが、二拍以上の語でこの記号が記されていない場合は、低平アクセントであることを示す。

但し、一拍の語は、アクセントを記さない。

[3] 考 察

(1)共通語の「ル」と「リ」に対応する拍の混同について

①安代方言

(ア) 共通語の「リ」に対応する拍が[r̥w̥]である語例は、以下に示すとおりである。
 [r̥w̥s̥w̥] (利子)、[r̥w̥so̥g̥w̥] (利息)、[h̥e̥:r̥w̥g̥w̥^dz̥w̥] (入り口)、[b̥ūr̥w̥k̥k̥ama] (ブリキ釜<やかん>)、[so̥r̥r̥u̥ker̥w̥] (そり返える)、[j̥ir̥w̥] (百合)、[h̥ajar̥w̥] (はやり<流行>)、[h̥ar̥w̥] (針)、[d̥zo̥r̥r̥w̥] (草履)、[ts̥ūr̥w̥] (釣り)、[ʔ̥f̥r̥ⁿdar̥w̥] (左)、[a^dz̥w̥^mbar̥w̥] (集まり<寄合い>)、[t̥f̥w̥:r̥w̥] (胡瓜)、[to̥r̥w̥] (鳥)、[nam̥ar̥w̥] (鉛)、[h̥adaor̥w̥] (はた織り)、[ho̥k̥ka^mb̥ūr̥w̥] (ほっかぶり)、[m̥awar̥w̥bag̥ko̥] (まわり番こ<週番>)、[o̥^mb̥o̥r̥w̥] (おぶり<子守り>)、[ʔ̥f̥r̥ⁿde̥r̥w̥] (日照り)、[Φ̥ūr̥w̥mas̥w̥] (振りまわす)、[to̥r̥w̥g̥ago̥] (鳥籠)、[ʔ̥f̥j̥to̥r̥w̥s̥w̥te̥] (ひとりして<ひとりでに>)、[Φ̥ūt̥ar̥w̥] (二人)、[k̥awar̥w̥] (代り)、[j̥imo̥r̥w̥] (イモリ)、

(イ) 共通語の「リ」に対応する拍が[r̥w̥]~[r̥i]である語例は、以下に示すとおりである。
 [r̥w̥ŋk̥^ç]~[r̥iŋk̥^ç] (恪気)、[ar̥w̥]~[ar̥i] (蟻)、[ir̥w̥]~[ir̥i] (襟)、[kamak̥^çir̥w̥]~[kamak̥^çir̥i] (かまきり)、[ʃak̥k̥ūr̥w̥]~[ʃak̥k̥ūr̥i] (しゃっくり)、[to̥fo̥r̥w̥]~[to̥fo̥r̥i] (年寄り)

(ウ) 共通語の「リ」に対応する拍が[r̥i]~^{*}[r̥w̥]である語例は、[g̥^çir̥i]~^{*}[g̥^çir̥w̥] (義理)、[k̥^çir̥igo̥m̥i]~^{*}[k̥^çir̥ūgo̥m̥i] (切り込み<塩辛>) の2例である。

(エ) 共通語の「ル」に対応する拍が[r̥w̥]である語例は、以下に示すとおりである。
 [h̥ar̥w̥] (春)、[ar̥w̥] (有る)、[d̥zar̥w̥] (策)、[o̥g̥^çir̥w̥] (起きる)、[k̥ūr̥w̥ma] (車)、[s̥ūr̥w̥s̥w̥] (印)、[ts̥ūr̥w̥] (蔓)、[ts̥ūr̥w̥] (釣る)、[jar̥w̥] (やる)、[ne̥r̥w̥] (練る)、[s̥ūr̥w̥] (磨る)、[s̥ūr̥w̥] (剃る)、[h̥agar̥w̥] (計る)、[j̥ūr̥w̥s̥w̥] (許す)、[w̥agar̥w̥] (分かる)、[dar̥w̥] (だるい)、[naⁿde̥r̥w̥] (撫でる)、[ūge̥r̥w̥] (受ける)、[mo̥ŋ̥ūr̥w̥] (もぐる)、[o̥r̥w̥] (折る)、[k̥ūr̥w̥] (来る)、[hahe̥r̥w̥] (走る)、[ʔ̥f̥j̥kar̥w̥] (光る)、[no̥g̥o̥r̥w̥] (残る)、[no̥^mb̥ir̥w̥] (伸びる)、[to̥r̥w̥] (取る) …。

以上は、宇土沢氏の資料である。

又、[to̥r̥w̥] (取る)、[de̥h̥ar̥w̥] (出る)、[o̥ŋ̥ar̥w̥] (成長する) などの、語幹末尾が[r̥]である動詞の連用形は終止形と同じ音になる。

例:[to̥r̥w̥te̥:] (取りたい) (注4)、[de̥h̥ar̥w̥te̥:] (出たい)、[o̥ŋ̥ar̥w̥naŋ̥ara] (成長しながら)

以上の動詞活用形について、斎藤氏、高村氏にも確認したが、同様の結果が得られた。

以上をまとめると、次のようである。

○[r̥w̥]と[r̥i]、(または^{*}[r̥w̥]) によって意味が区別される語例が見当たらない。

○[r̥w̥]が圧倒的に優勢であり、まれに現れる[r̥i]は、[r̥w̥]、(または^{*}[r̥w̥]) との間で

ゆれを示す。

これらのことから、[rū]と[rī]は音韻的に区別がなく、同一の拍/ru/に核当する異音であると解釈するのが妥当であろう。(注5)

また、このように解釈することは、当方言で共通語の「ス」と「シ」、「ズ」と「ジ」、「ツ」と「チ」に対応する拍が、それぞれ/su/、/zu/、/cu/に統合していることを考慮すると、「体系的均齊的分布の作業原則」にも則しているといえよう。

すなわち、安代方言は、共通語の「ル」と「リ」に対応する拍が完全に/ru/に統合しているといえるのである。

なお、高村氏に確認の調査を行なったが、その結果は以下のとおりである。

[rūsū] (留守、利子)、[harū] (春、針)、[tō.rū] (取る)、*[tō.rū] (鳥)、[k^o.irū] (切る)、*[k^o.irū] (霧)、[o₁.^dzūrū] (落ちる)、[o₁.^dzūrū] (おつり)

このように、「鳥」、「霧」の2例を除いて共通語の「リ」に対応する拍にも「ル」に対応する拍にも[rū]が現われた。

「鳥」と「霧」に現われた*[rū]は、[tō.rū] (取る) や [k^o.irū] (切る) の[rū]に比べて僅かに前よりという程度の微妙な発音であり、さらに「鳥」と「取る」、「霧」と「切る」は明らかにアクセントが異なるので、高村氏におけるこの音も/ru/に核当する異音と解釈できよう。

② 盛岡方言

<士族ことば>

/ru/と/ri/の拍は、[harū] (春)、[harī] (針) の pair で認定される。

例:[k^o.irū] (切る)、[k^o.irī] (霧)、[tō.rū] (取る)、[tō.rī] (鳥) …

共通語の「リ」に対応する拍が[rū]である語例は[a^d.zū^m.barū] (集まり<寄合い>) 1例のみであった。

<町ことば>

/ru/と/ri/の拍は、[rīsū] (リス)、[rūsū] (留守、利子) の pair で認定される。(注6)

(ア) 共通語の「リ」に対応する拍が[rū]である語例は、以下に示すとおりである。
[tō.rū] (鳥)、[o₁.^dzūrū] (おつり)、[no₁go₁ŋ^{irū}] (鋸)、[to₁fo₁rū] (年寄り)

(イ) 共通語の「リ」に対応する拍が[rū]~[rī]である語例は、以下に示すとおりである。

[ko₁.mō₁rū]~[ko₁.mō₁rī] (子守り)、[ko₁:mō₁rū]~[ko₁:mō₁rī]~[ko₁:mō₁rūkko₁]~[ko₁:mō₁rīkko₁] (蝙蝠)、[ke₁.mūrū]~[ke₁.mūrī]~[ke₁.mūrū^kko₁]~[ke₁.mūrī^kko₁]

[ho₁go₁rū̄]~[ho₁go₁rī̄] (埃)、[ʰʃīⁿdarū̄]~[ʰʃīⁿdarī̄] (左)

(ウ) 共通語の「リ」に対応する拍が^{*}[rū̄]である語例は^{*}[kirū̄] (霧) 1例であった。

(エ) 共通語の「リ」に対応する拍が[rī̄]である語例は[rīsū̄] (リス) 1例であった。

(オ) 共通語の「ル」に対応する拍が[rū̄]である語例は、以下に示すとおりである。

[tō₁rū̄] (取る)、[o₁zū̄rū̄] (落ちる)、[k^oī̄rū̄] (切る) …

なお、安代方言のように語幹末尾が[r]である動詞の連用形が終止形と同じ音になることはない。

以上より、盛岡方言は、/ru/、/ri/が/ru/に統合する傾向が、土族ことばで弱く(1例のみ)、町ことばで強いといえる。

③久慈方言

/ru/と/ri/の拍は、[ʰʃīⁿtō₁rū̄] (肥る)、[ʰʃīⁿtō₁rī̄] (1人) の pair で認定される。

例:[k^oī̄rū̄] (切る)、[k^oī̄rī̄] (霧)、[tō₁rū̄] (取る)、[tō₁rī̄kko₁] (鳥) …

④舞川方言

/ru/と/ri/の拍は、[hārū̄] (春)、[hārī̄] (針) の pair で認定される。

例:[k^oī̄rū̄] (切る)、[k^oī̄rī̄] (霧)、[tō₁rū̄] (取る)、[tō₁rī̄kko₁] (鳥) …

以上のように、久慈方言と舞川方言には、/ru/と/ri/の拍が統合する傾向はない。

(2)共通語の「ヌ」と「ニ」に対応する拍の混同について

①安代方言

(ア) 共通語の「ニ」に対応する拍が[nū̄]である語例は、以下に示すとおりである。

[nū̄gū̄] (肉)、[nū̄ge₁rū̄] (逃げる)、[nū̄^dzū̄] (虹)、[nūsū̄] (西)、[nū̄gjo₁]~[dzū̄ndzo₁kko₁] (人形)

(イ) 共通語の「ニ」に対応する拍が[nū̄]~[nī̄]である語例は以下に示すとおりである。

[nū̄]~[nī̄] (荷)、[nū̄gū̄rū̄]~[nī̄gū̄rū̄] (濁る)、[nū̄gī̄rū̄]~[nī̄gī̄rū̄] (握る)、[nū̄jārū̄]~[nī̄jārū̄] (似合う)、[ganū̄]~[ganī̄] (蟹)、[nū̄jāga]~[nī̄jāga] (賑やか)、[dze₁nū̄]~[dze₁nī̄] (銭)、[nū̄^oī̄gī̄]~[nī̄^oī̄gī̄] (綿) [nū̄ne₁]~[nī̄ne₁] (二年)、[taggenū̄]~[taggenī̄] (互に)、[me:nū̄^dzū̄]~[me:nī̄^dzū̄] (毎日)

(ウ) 共通語の「ニ」に対応する拍が[nī̄]である語例は、[anī̄] (兄)、[o₁nī̄] (鬼) の 2例である。

(エ) 共通語の「ヌ」に対応する拍が[nū̄]である語例は、以下に示すとおりである。

[nūrū̄] (塗る)、[nūrū̄] (縫う)、[nū̄gū̄] (脱ぐ)、[nū̄ge₁rū̄] (脱げる)、[nūrū̄kko₁]~[nūrū̄] (犬)、[k^onū̄] (絹)、[nū̄gū̄] (抜く)、[nū̄re₁rū̄] (濡れる)、

[nūsūmū] (盗む)、[nūsū^mbīdo₁] (盗人)、[nūrū₁] (温い)、[sūnū] (死ぬ)

(オ) 共通語の「ヌ」に対応する拍が[nī]である語例は[nīno₁] (布) の1例である。

以上の資料は宇土沢氏のものである。

なお、高村氏に確認の調査を行なったが、結果は以下のとおりである。

[nūrū] (似る、塗る、煮る)、[nūrū] (縫う)、[nūsū] (西)、[nūsū] (主)、
[nūgū] (抜く)、[nūgū] (肉)

また、語幹末尾が[n]である動詞[sūnū] (死ぬ) の連用形も、終止形と同じ音になる。

例:[sūnū tagū nē:] (死にたくない)

これは、斎藤氏、宇土沢氏、高村氏とも同様の結果が得られた。

以上をまとめると、次のようである。

○[nū]と[nī]の拍によって意味が区別される語例が見当たらない。

○[nū]と[nī]のゆるる語例が比較的多い。

○全体的に[nū]の方が優勢であり、又、[nī]が安定して現れることは少ない。

これらのことから、[nū]と[nī]は音韻的に区別がなく、同一の拍/nu/に核当する異音であると解釈するのが妥当であろう。

また、このように解釈することは、「体系的均齊的分布の作業原則」にも則していると言えよう【(1)①を参照】。

すなわち、安代方言は、共通語の「ヌ」と「ニ」に対応する拍が完全に/nu/に統合しているといえるのである。

②盛岡方言

<士族ことば>

/nu/と/ni/の拍は、[nūrū] (塗る)、[nīrū] (煮る) の pair で認定される。

例:[nūgū] (抜く)、[nīgū] (肉)、[nūgū] (脱ぐ)、[nīge] (苦い) …

共通語の「ニ」に対応する拍が[nū]である語例は、[nūsū] (西)、[mainū^dzū] (毎日) の2例のみである。

<町ことば>

/nu/と/ni/の拍は、[nūrū] (塗る)、[nīrū] (煮る、似る) の pair で認定される。

例:[nūgū] (抜く)、[nīgū] (肉)

共通語の「ニ」に対応する拍が[nū]である語例は、[nūsū] (西) 1例のみである。

以上より、盛岡方言は、士族ことば、町ことば共に、/nu/、/ni/が/nu/に統合する傾向が弱いといえる。

③久慈方言

／nu／と／ni／の拍は、[nūrū] (塗る)、[nīrū] (似る) の pair で認定される。

(ア) 共通語の「ニ」に対応する拍が[nū]である語例は以下に示すとおりである。

[nūsū] (西)、(nūr^dzū) (虹)

(イ) 共通語の「ニ」に対応する拍が[nū]～[nī]である語例は、以下に示すとおりである。

[nūgū]～[nīgū] (肉)、[nūbū]～[nībū] (鈍い)、[nūr^cʃagū]～[nī^cʃagū] (二百)、
[i^dzūnū^dzū]～[i^dʒīnī^dzū] (一日)

その他は、共通語の「ヌ」に対応する拍は[nū]、「ニ」に対応する拍は[nī]である。

例:[nūge_Lrū] (脱げる)、[nīge_Lrū] (逃げる) …

以上より、久慈方言は、／nu／、／ni／が／nu／に統合する傾向があるが、盛岡方言や舞川方言【(2)④参照】よりいくらか強いという程度である。

④舞川方言

／nu／と／ni／の拍は、[nūrū] (塗る)、[nīrū] (煮る) の pair で認定される。

例:[nūgū] (抜く)、[nīgū] (肉)、[nūsū] (主)、[nīsū] (西) …

共通語の「ニ」に対応する拍が[nū]である語例は[nūde_Lrū] (似ている) 1例のみであった。

以上より、舞川方言は、／nu／、／ni／が／nu／に統合する傾向が弱いといえる。

[3] まとめ

安代、盛岡、久慈、舞川、各方言の、共通語の「ル」と「リ」、「ヌ」と「ニ」に対応する拍の統合現象についてまとめると、以下のとおりである。

①安代方言

○共通語の「ル」と「リ」に対応する拍が完全に／ru／に統合している。

○共通語の「ヌ」と「ニ」に対応する拍が完全に／nu／に統合している。(注7)

②盛岡方言

○共通語の「ル」と「リ」に対応する拍が／ru／に統合する傾向があるが、その傾向は、士族ことばで弱く、町ことばで強い。

○共通語の「ヌ」と「ニ」に対応する拍が／nu／に統合する傾向があるが、その傾向は、士族ことば、町ことば共に弱い。

③久慈方言

○共通語の「ル」と「リ」に対応する拍が統合する傾向は見出せない。

○共通語の「ヌ」と「ニ」に対応する拍が／nu／に統合する傾向があるが、その

傾向は、盛岡方言や舞川方言に比べていくらか強いという程度である。

④舞川方言

○共通語の「ル」と「リ」に対応する拍が統合する傾向は見出せない。

○共通語の「ヌ」と「ニ」に対応する拍が／nu／に統合する傾向があるが、その傾向は弱い。

共通語の「ル」と「リ」、「ヌ」と「ニ」に対応する拍の統合現象は、盛岡方言の士族ことば、町ことばのように、位相によって異なることも考えられる。今後は、調査地点をふやすと共に、これらの位相による違いについても調べてゆきたい。

最後に、調査に御協力下さった方々、そして色々とお指導して下さいました千葉大学の内間直仁先生と、都立大学の島大郎先生に深く御礼申し上げます。

(注)

1. 小松代氏(1976)には、次のような例が示されている。(ここではその一部を示す)

ヒル(昼食)ヒリ、キルモノ(着物)キリモン、リップ(立派)ルッパ、トックリ(徳利)トックル…。
イヌ(犬)エニ、ヌレル(儒れる)ニレル、アニ(兄)アヌ、ニシ(西)ヌス…。

2. 盛岡の調査に際して、informant から、盛岡のことばは士族ことばと町ことばで可成り異なるという情報を得た。実際に調査してみると、本稿で扱った／ru／と／ri／の統合現象の他に、敬語法などで違いがみられた。士族ことばとは旧士族階級の人たちのことばで、町ことばとは伝統的に商工業にたずさわっている人たちのことばである。

3. 一関市舞川は、地理的には、一関市一関と北上川によって隔っており、また行政的には、一関市一関が田村藩に属していたのに対して伊達藩に属していた。そのために、昔から、いわゆる一関とはあまり交流が盛んでなかったとのことである。舞川方言と称するゆえんはここにある。

4. 「取りたい」には、活用語尾を含む拍が促音化した[$to_{\perp}Qte:$]も現れる。

5. 宇土沢氏は、「このあたり(安代町荒屋新町)のことばでは、共通語のリもルもみんな、ルになるようだ」と内省しておられた。

このときの発音は、リは[ri]、最初のルは[rū]、二番目のルは[※][rū]であった。

6. リスは昔から盛岡に棲息し、[r̄tsū]以外の呼び名は用いないとのことである。

7. 本堂寛氏は「3. 岩手方言」(『全国方言基礎語彙の研究序説』平山輝男編、1979)の中で、安代町荒屋新町方言に／ru／と／ri／、／nu／と／ni／を認定しておられる。

参考文献

大島 一郎 「各地の方言(地域別)」(『標準語と方言』)1977、文化庁

小松代融一「岩手方言の語彙(岩手方言研究第三集)」1959、岩手方言研究会

【岩手方言の音韻と語法】1976、岩手方言研究会

佐藤喜代治「岩手県三陸地方北部の言語調査報告」(『日本文化研究所報告別巻・8』)1966

佐藤喜代治、加藤 正信「青森県東南部・岩手県西北部地方の言語調査報告—音韻・アクセントの部—」

(『日本文化研究所報告別巻・11』)1974

「青森県東南部・岩手県西北部地方の言語調査報告—文法・語彙の部—」(『日本文化研究所報告別巻・12』)1975

服部 四郎『言語学の方法』1960、岩波書店

平山輝男編『北奥方言基礎語彙の研究』1982、桜楓社

本堂寛 「3. 岩手方言」(『全国方言基礎語彙の研究序説』平山輝男編)1979、明治書院

「岩手県の方言」(『講座方言学、4. 北海道、東北地方の方言』飯豊毅一他編)1982、国書刊行会

森下 喜一 「北奥方言における音韻変化の特色について—特にシチジとスツズを中心に—」(岩手医科大学教養部研究年報第18号)1983